

島根県バレーボール協会

—— これまでのあゆみ

大正10年、島根師範附属小学校教員の園山亀蔵氏が、東京高等師範学校での教員研修会でバレーボールを知り、附属小学校の公開授業で紹介したのが本県のバレーボール導入の始まりとされる。この導入期から昭和63年までの「島根県バレーボールの歩み」については、平成元年に島根県体育協会編として出版された「島根県体育史」に詳細が掲載されているので、ここではその後の歩みを記す。

【全国大会での活躍】

前掲書発刊直後の昭和63年、日立金属安来女子チームが第43回京都国体において、成年女子1部（9人制）で地元京都を破り優勝を果たした。同年、東出雲中学校男子チームも第18回全日本中学生バレーボール選手権大会（全中：仙台市）で全国優勝を果たした。同年の全国都道府県対抗中学バレーボール大会（当時はさわやか杯）においても、東出雲中学校の選手を核とした男子選抜チームが準優勝に輝いた。

その後は全国上位成績からは遠ざかっていたが、全国高専体育大会において松江高専の男女チームが度々優勝、準優勝に輝いている。ママさんやヴィンテージ男子でも全国大会でブロック優勝するなど全国大会で活躍している。



第23回全国家庭婦人バレーボールことぶき大会開会式（松江市総合体育館）

近年、ビーチバレー競技で男女高校生が全国上位の成績を残している。令和元年の茨城国体から正式種目となった大会において準優勝した藤原健斗・江隅孝太（大東高校）ペア、令和4年の全日本ビーチバレージュニア男子選手権大会で優勝した吉岡健太・江角翔央（大東高校）ペアの活躍は見事であった。

【協会運営】

任意団体として昭和21年に設立された当協会は、「島根県バレーボール協会規約」に基づいて運営している。時代に沿った改正を重ねながら、親規約の下、表彰規程、旅費規程、会費・顧問・参与推挙基準等を定めガバナンス強化を図っている。

組織は、県協会の傘下に9連盟と市町村連盟で構成している。

協会の主な事業は、①競技会の開催②指導者養成・

審判員養成講習会及び強化に関する企画と講習会の開催③本協会を組織する連盟の相互の連携及び指導④優秀な成績を収めたチーム・選手及び顕著な功績のあった団体・個人の表彰⑤島根県スポーツ協会との連絡・連携⑥その他本協会の目的を達成する事項である。

【会長・理事長】

本協会を代表し会務を総理する会長と、業務を統括し掌理執行する理事長についてのみ前掲書記載以降の者について記しておく。

会長 中村芳二郎（昭和53～平成4年）、林正雄（平成5～同16年）、荊尾俊（平成17～同24年）、大森栄二（平成25～令和4年）、岸本強（令和5年～現在）

理事長 井山充弘（昭和62～平成10年）、井原俊一（平成11～同12年）、岸本強（平成13～同22年）、青砥二郎（平成23～同30年）村上享（令和元年～現在）

—— 現在の状況

令和4年度の本県JVA登録チーム数は男子76（148）、女子176（205）、混合28、合計280（358）であり、選手・スタッフ登録数は男子1335人（1494）、女子2748人（3228）、合計で4083人（4722）である（*カッコ内は10年前の平成24年の数値、ママさん連盟は除く）。

本県バレーボール人口は明らかな減少傾向にある。少子化とともにスポーツの多様化も相まってチーム数も減り、チーム当たりの構成人数も減っている。

このような状況下ではあるが、令和7年度に中国ブロック開催予定のインターハイ・バレーボール競技や、令和12年度開催予定の2030年島根かみあり国スポ・全スポに向けて、協会内に強化を策定・推進する「国スポ推進室」を立ち上げ、小中学生の普及・育成強化、高校生強化、成年男女の強化、ビーチバレーの強化に協会挙げて取り組んでいる。

—— これから

今後は人員不足によってチームを構成できない個人が活動できる仕組みを作る必要がある。小学生の混合チームの増加は好ましい傾向である。中学校部活動の地域移行の取り組みにも当協会が積極的に関与していく必要がある。

中学連盟を中心として、全国都道府県対抗中学バレーボール大会（JOC）に向けた選手の育成・強化事業を年間通して行っている。この取り組みが県の競技力アップに大きく貢献しており、育った選手の多くが高校や大学で活躍している。またその後、日本バレーボールリーグ機構のセミプロチームに所属して活躍する選手の輩出にもつながっている。実績を鑑み、今まで以上に県協会を挙げてこの取り組みを支援していく。

この先も、県民にとって魅力ある夢のある組織であるよう邁進していきたい。